

A-127 茶道と懐石料理の研究第一報 (福岡県内における茶道と懐石料理の意識調査)

中村矩大

○勝山洋子 紅上一子

目的 我が国においては、心と行動が一つになつた「道」と呼ばれるものが長く伝統として受けつがれて來た。代表的なものをあげれば茶道、華道、書道、香道などである。戦後30年を過ぎ、平和の中へ住むこれら伝統的なものは、一斉に開花した現の昨今である。しかし、本当にその心が理解されての隆盛であろうかと考えておふんで、「食物」による関係の深い茶道をとりあげ、意識調査をS.46年、S.50年ヒ福岡県内において実施し、現状を比較する事が出来たので報告する。

方法 調査方法としては、茶道に関する項目および懐石料理に関する項目とし、アンケート方式により、項目別に集計し、比較した。対象者は、年令20才から60才までの男女とし、職業別、調査場所により分類した。

結果 茶道経験の有無においては、S.46年では、総数554名に対し「有り」と答えた者は43%、「無し」は52%、無回答5%であった。S.50年では、総数498名に対し、「有り」は44%、「無し」は48%、無回答8%であった。茶道経験無い回答者では、興味がないという答が多かった。茶道の目的に関しては、S.46年、S.50年共に茶道経験の有無にかかわらず、「精神統一」と答えた者が半数以上であった。懐石料理に関する知識では、懐石料理を知っている者は、S.46年で全体の27%、S.50年は61%と上昇していた。これは男女共同様に知識は高まっていた。